

## COVID-19 下における教職課程教員の取り組み — 2020 年度のオンライン授業を振り返って —

立教大学 教職課程

### 〔はじめに〕

2020 年度、国内の多くの大学では、学生の継続した学びに向け、オンライン授業の活用を余儀なくされた。学生のみならず、教員にとっても初めての取り組みとなったケースは少なくないことが予想される。本稿では、上記の状況下で、教職課程教員がどのようにオンライン授業に取り組み、そして、どのような成果や課題を見出していったかを紹介する。

### 〔方法〕

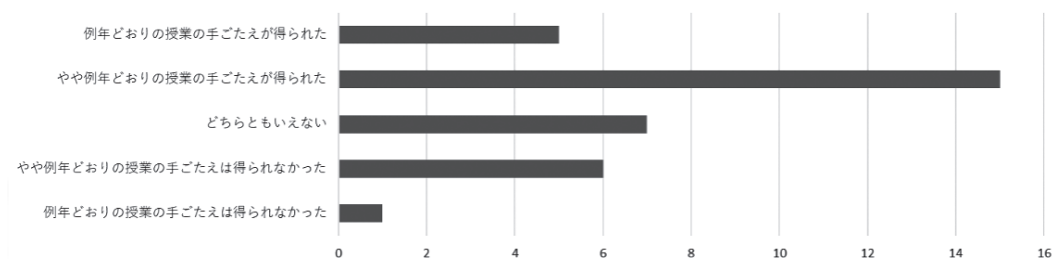
教職課程の兼任講師、専任教員を対象に、①オンライン授業に対する全体的な感想(5段階)とその理由、②オンライン授業における課題について、③オンライン授業における成果や利点について、④オンライン授業における学生の反応や意見、希望などについて、⑤当該年度に担当した授業に対する意見など、を2020年12月27日から2021年1月26日までの期間に、Go

ogle Formsにて回答を求め、34名より回答が得られた。

### 〔結果〕

1. 担当科目におけるオンライン授業に対する全体的な感想(5段階)
2. 1.に対する理由(編集上、文意を損なわない範囲で修正等を行った)
  - (1) 「手ごたえが感じられた」を選択した教員のコメント(一部)
    - ZOOMの音声&共有画面で授業をした。接続の悪化やダウンするリスクがあるため、顔出しはしなかった。学生が少数だったので、音声のみでも声で聞き分けができて100分があつという間に過ぎた。授業前に添付で資料を送ってもらい、それを共有画面で見ながら、質疑応答なり議論をし、教員が提案なり訂正を資料に書き込んだ。それを授業後、学生に返却することで学

ご担当の科目のオンライン授業に対する全体的な感想



- 生は特にノートテイキングする必要なく、ZOOMの画面と音声に集中できたと思う。
- チャットを通して積極的に発言してくれる学生が数名いた。もっとも、その他の学生がどこまで授業に参加できていたのかは確認できない。
  - 担当科目はそもそも理念的・概念的な内容を多く含むうえに、教職課程コア・カリキュラムで要求されることも多く、それらを限られた時間で説明していくとなると、当然ながら一つひとつに時間をかけることができない。ただ、オンデマンド型として実施し、複数回聞き返すことを進めていたことで、学生の理解度が例年よりも増した。
  - Google Formsを利用して授業中に学生らに質問し、それをすぐに返ししながら授業を進めることができた。
  - 毎回リアクションペーパーをとっているが、対面とほぼかわらないと感じた。
  - 履修生が10名以下の授業だったので、オンライン授業ながら、リアルタイム双方向の授業の中で、討論やペアワーク、意見やアイデアの共有が予想以上に可能で、学生もとても積極的に参加した。ただ本授業の大きな柱のひとつである模擬授業については、教科の特質も踏まえ、音声指導に始まり、板書、対面での指示や対応など、やはり限界がある点は否めない。しかしオンライン模擬授業という製薬の中でも、プレゼンテーション・スライドを効果的に活用して授業を工夫しようとする学生の姿勢に、教職課程の学生に今後期待されるICTの向上にある程度役立ったことがうかがえ

る。

- 講義自体に大きな支障はなく、オンラインでも十分に講義が行えるという手ごたえがあった。ただ、学生の反応が分からず、学生のニーズに合わせて柔軟に講義の内容を調整していくようなことは行えなかった。
- 集中講義かつ例年より人数が少なかったことで、学生一人ひとりを確認しながら授業が展開できた。
- 内容を一部変更してオンラインに適合するようにすれば、問題なく授業展開できた。
- 教育実習で行った授業について模擬授業を行ったが、オンラインでも十分可能であった。内容上実施できなかった学生もいたが、実施した学生の中にはオンラインならではの取り組みを見せる者もいた。
- ZOOMを活用して話題提供や模擬授業、グループディスカッションは対面授業と遜色なく行うことができたが、各グループのディスカッションの様子を把握できなかったり、個別面談を実施できなかったりしたことが残念であった。
- 全員が積極的に課題をすべて提出し、教科教育に関する意欲が高まっていた。
- 学生の表情を確認することができないので「例年通りの授業の手ごたえが得られた」とまでは回答できなかったが、挙手のボタンや投票機能、Google Forms、Blackboardのテスト機能、ブレイクアウトルームなどを積極的に利用することで、ある部分では、対面授業よりもきめ細かい双方向の授業になっていたようにも思う。もっと工夫できるところはあるように考え

た。

- 少人数であり ZOOM でも対面と同様に学生の反応がよくわかった。
- 本学での授業は、今年度初めてだったので「例年と比較」することはできないが、毎回のリアクションペーパーから、学生が授業内容や他の学生の前時のリアクションペーパーへの記述へ興味をもって考えることが伝わってきた。
- ZOOM のブレイクアウトや動画の使用が思ったよりも順調であり、学生の振り返りでも、そのような記述があった。

(2) 「どちらともいえない」を選択した教員のコメント（一部）

- 個々の学生の課題をじっくり読み、リアクションすることができた。また、学生が積極的に課題に取り組んだことが、提出された指導案から推察できた。一方で、科目独自の授業を実施することができず、参加体験型の授業運営が難しかった。
- オンラインではなく、ハイブリッド型の対面で行った。毎回 2～3 名程度がオンラインでの参加であった。
- オンラインでの“模擬授業”の試行は、もちろん、どうにか実施も工夫もできたが、どこまでいっても、対面授業の“模擬”には届かないと考える。
- ZOOM で授業を行うことが中心であったが、必要があれば反応ボタンなどを利用して、学生の様子を確認しながら授業を進めることができた。
- 学生の顔や表情がみえないことにより、学

生の授業中の反応がわからなかった。

- 今年が初めてで比較はできないため、中央の「どちらともいえない」とした。リアクションペーパーの内容は思った以上のものであった。できるだけ「回答」を次回に述べるようにした。
- 対面型と全く同じことはできないという難しさがあったが、オンラインという形式が、学生の事前学習や発信、意見交換を促した面もあった。

(3) 「手ごたえが感じられなかった」を選択した教員のコメント（一部）

- 基本的に必要な知識は伝え、受講生も熱心に取り組んでいる様子ではあった。しかし例年、講義中に学生の反応（表情など）を見ながら調節していたので、オンラインではそれができなかった。チャット等を使ってなるべく反応を見るようにしたが、直接のやり取りほどはできなかった。
- 学生の反応を把握しきれない点や、模擬授業準備の様子を直接見てその場で助言することができない点が例年と大きく異なる点であった。
- 学生同士の対話や協同（協働）での課題解決が、対面のときと同等にはできなかった。
- 授業をやっている際に、授業での学生の反応（リアクション）が見えにくい。
- 講師の都合で、オンデマンド配信、その後の掲示板への書き込みという授業形態をとったため、授業を進めながらの学生のリアルな反応を得ることはできなかった。例年、その反応をもとにしながら、事例の詳

細等を伝えているが、今年は録画配信という点もあり、その点が非常に難しかった。一方で、掲示板への事例への対応書き込みは、例年であると講師が次回にピックアップして紹介するなどをしてしていたが、学生同士の書き込みをリアルタイムで見られることは利点であった。

### 3. オンライン授業における課題について(一部)

- 他大学では、Web Class を使ってチャットで授業をした。本学でも、そのような形で授業をして、月に1度程度、音声のみのZOOM 授業をする、というのが出来ればいいと思う。ただ、履修者が2~3名程度であれば、今年度同様のスタイルでいいかと考える。
- 学生の顔が見えない。学生の反応がわからず、学生からの意見や質問がどうしても少なくなってしまう。
- 学生同士の対話や協同での課題において、画面の顔出しを強要できないことである。教員も、どのような学生であるのか、個性などもつかみづらかった。
- カメラをオフにしているため、学生の参加状況が把握できない。
- LMS システムが特殊で、なおかつ、複数(立教時間と Blackboard) 併存しているため、それらを統合的に運用するのが、教員に委ねられている点。また、次年度については、特別に認めていただいたが、オンライン授業が同時配信しか認められていない点。
- 受講者数が多く、双方向型の授業ができない。また、教員のオリジナリティを活用した授業などは、対面でなければ実施できないことが課題である。さらに、学生の表情を見ることができないため、理解度を推察できない。
- 通信エラーであったり、通信制限で学生の顔が見られなかったり反応が分からなかったりする部分があり、講義をしっかりと聞いているのか分からなかった。
- (本科目に関連して) 映像による授業観察を実施できるものの、知識が不足気味の学生が単独で観察しても高まりがみられない。グループによる観察と討議ができないところに課題がある。
- オンラインならではの、効果的な授業のやり方(資料提示や話し方など)があると思うが、それについてまだ自分の修練度が足りないのもっと工夫したいと考えている。
- ビデオをオフにしている学生の表情が確認できず、理解の状況や興味関心の度合いが判断しづらいこと。
- うまくいかないことがあると、リカバリーが難しい。意志の疎通がやりにくい。
- 実験を伴う模擬授業を行うことに課題がある。また、ZOOM のブレイクアウトルームを利用して3つのグループに分けて議論させたことがあるが、一人の教員が見て回るのは大変であった。大学生であるからある程度の議論をさせることができたと思う。もし、中高生ならば、議論が進まなかったのではないかと考える。
- 対面の学生中心の授業だったので、オンライン上の学生にとっては、いい環境とは言

- えなかったかもしれない。
- いくら、ブレイクアウトセッションだの、書き込み合いだの試みたところで、現状のスペック、端末では、どの授業も一対一対応の通信の単純総和でしかないと思う。
  - 教員の準備に時間がかかること、個別対応の必要性が生じること、提出物確認のためのダウンロードに時間がかかることなど。教員養成にかかわる授業であるため、対面での授業はある程度必要ではないかと感じている。
  - メール、課題のチェックだけでなくオンライン授業用に資料を作成したため、準備は通常の3倍以上であった。模擬授業の弱点を補うため、授業とは別に毎回一人60分程度のリハーサル時間を設定し、技術指導も含めた事前の助言を行った。やはり教員側の負担は大きい。
  - グループワーク中の学生の姿について、1グループしか同時には見ることができないため、全員を支えきれない。教室であれば、どの学生があまり学べていなくて、どのグループが機能していないか、ある程度、同時に見ることができる。
  - 教師が話している時間や、学生が発表している時間の、聞き手の反応をとらえにくい。
  - 実際の学校の授業ビデオの子どもの姿から学ぶ、という授業展開をしてきたが、オンデマンド配信は提供校の許可がおりず、ライブ配信の形になったが、学生のWi-Fi環境などで、かなり映像が見づらくなってしまっている。また、ビデオ観察中でも、視聴する学生同士が支え合うという構造をつくりたいのだが、オンラインでつくるのが難しい。
  - 次年度はリアルタイムでのオンライン配信授業となる予定であるが、学生にずっと画面オンにしているわけには行かない中で、学生のリアルな反応を、チャットなどを通して、どのようにして取り込むのが重要であると思っている。本務校の講義においてオンライン配信した際に、チャットへの学生の反応は通常の対面授業よりも、多くの反応が得られているため、上手に利用していきたい。
  - 学生の反応が見えないところ。どれだけ理解できているのか、どの部分から説明をしなければならぬかなど把握しづらい。リアクションペーパーを用い把握するよう努めた。しかし、その場の雰囲気や学生の表情、学生とのやりとりから把握していた以前に比べ、次の講義で改めて説明することとなり、時間を要する場面が増えた。こうした課題を克服するために、こちらも説明の仕方などをオンライン講義用に再考していく必要があると感じている。
  - ZOOMには入ってきているが、きちんと受講していない学生もそれなりにいるのでは、と思ってしまう。
  - 大人数になった場合の出席の確認・管理があげられる。
  - 成績評価と、学生の反応が把握しにくい点があげられる。
  - 学生の顔がみえないことが最大の課題だと思う。勤務先では少人数の授業では、できる限り学生に顔を出してもらうようにして

- いる(もちろん無理強いはしない前提で)。学生の表情がわからなければ授業の反応も可視化されないため、教員として授業が上手くいっているのか判断がつかない。20人以下の授業などは、学生の下承を得たうえでであれば、顔出しを可能としてほしい。
- リアクションペーパー(コメントペーパー)の収集とその情報の学生への共有ができない点。立教時間を使用すると可能と聞いているが、ブラックボードで案内や教材送付をしているため、ブラックボードで行いたいのがそれができないようだ。こうした細かい機能のマニュアルまで作成されていないため、とても不便である。細かな機能についても回答していただけるように改善してほしい。
  - レポートの収集と点検がとても煩雑な点。ウェブ上で学生一人ひとりのレポートをダウンロード(一括ダウンロードはできても、印刷をするうえでは個別でファイルをあげる必要がある)して印刷をしたうえで点検をする必要がある。勤務先では学部学生にSAやSAを雇用してこうしたレポート管理をお願いしている。リモートが中心になる授業であれば、兼任講師にもSAやTAをつけることを検討していただくと助かる。
  - 実技科目など対面授業ならではの授業について、オンラインでどのように模擬授業させるか。共同体意識をいかに形成していくか。
  - 外出(ドライブ、ショッピング等)しながら、授業を受けている学生が時々いたのが

気になった。一方で、就活と授業が重なってしまった学生が、完全に欠席するのではなく、移動中も含め時間の許す限り出席していたという好ましいケースもあった。

- 通信状態が時に、また、受講者により、差が出るのが課題だと感じる。また、受講生同士が<ヨコ>につながりにくい点がある。もっとも、受講生は100名以上であり、そもそも<ヨコ>は難しい可能性もあげられる。
  - オンライン授業であっても問題はないと考える。
  - 講義のときにカメラがオフなのは構わないが、ブレイクアウトルームのとき、グループワークの際にはカメラをオンにして、対面授業と同じような感覚で取り組んでほしいと依頼をした。しかし徹底できないのが残念であった。Wi-Fiやデータ容量などの環境の問題もあると思うので強くは求めなかったが、雰囲気がぜんぜん違うと感じた。カメラオンの方が盛り上がっていたように見受けられた。
  - その場その場での学生の授業への反応がわからないこと、授業内容からちょっと離れた話題(けっこう重要だと考えている)が出しづらいことなど。
  - 学生同士の交流から生まれる新たな答えを導き出すのが難しかった。
4. オンライン授業における成果や利点について(一部)
- Live授業をすべて録画して、事後に配信したことで、学生が見直すことができる。また授業者も実際の映像をみることで、改

善点を容易に見いだせる。

- 授業を学校以外の場所においても、その時間に授業ができるのでよい。この点は受講者側も同じと思われる。休講にせず、Live でできないときは、オンデマンドで対応できるのもよい。補講という余分な時間を授業者も受講者も費やさないで済む。
- 授業を録画できるので、欠席した学生にその録画を提供できること。
- 教職課程コア・カリキュラムで要求されることを扱うためには、莫大な学修時間を要するが、オンデマンド型とすることで複数回視聴することが、学習効果が上がること。また、副次的な効果として、例年本務校との時間割調整が難しく、御無理をお願いしてきたが、時間割上の制約がなくなっている点大きい。
- 学生が毎回の課題を着実にこなすこと。成績管理が容易であること。
- 動画を保存してあったので、欠席の学生も後から閲覧でき、出席の学生も復習に使うことができた。
- 授業映像で教科の特質に応じた「気になる場面」を繰り返し観ることができる。
- 通学時間が短縮できるために、授業準備や復習にかかる時間を増やせること。また、若干体調が悪くても受講できること。さらに、他の大学のケースだが、対人関係のトラブルや心理的問題などで登校が難しい学生にとっては、安心できる場所で受講することができること。
- 授業後に感想をメールで送付させたが、昨年まで用紙に記入してもらった時以上に詳細に記述してくれた。こちらもそれに答えるべく返信した。
- 人によっては周囲にまどわされず、集中できるのではないかと。資料をより詳細に作ることになるので、学生は資料を見直すことで授業後に復習しやすかったのではないかと。
- チャットや Google Forms を利用することで、授業中に個別の質問を受け、それを全体で共有することができたことが、最大の利点であったと考えている。また、Google ドキュメント、Google スライドなどを利用することで、学生らに共同作業させながら、一つの成果物を作成させることができたのも、良かったと考えている。
- 対面で実施とは言え、すべてオンラインに切り替えとなった場合でも、工夫すれば、オンラインでも可能だと思えた。
- 学生の資料の提示、共有のスムーズさ、学生の集中度（新奇さ、目新しさが大きい分、肯定的評価も割り引くべきだとは考える）。
- 通勤（通学）に時間がかからず、教員・学生にとって負担感や感染への不安感がないので、とても良いと思う。
- 個別の相談がしやすいのか、授業終了後に様々な相談で学生が残ることがとても多かった。また Google Classroom を効果的に利用できた。対面が始まってもぜひ利用したいと考えている。
- 意欲の高い学生にとっては、オンラインでもある一定水準、学ぶことはできる。
- やはり一つは感染予防である。加えて、条件が許せばどこでも受講可能という点は、

2 キャンパスある本学としては学生にとって便利であろう。現に、他キャンパスの学生が受講をしている姿も見られた。また対面授業以上の学生のリアクションがチャットという形であるが得られること、画面オンの際には、強制的に授業参加せざると得ないので、ワークの際のさぼりがへること、学生の関与度がより高まる講義展開が可能であることが成果と利点であると思われる。通信機器・PC 機器を駆使することで、オンライン配信ならびに対面授業が同時にできるようになることで、この成果はより高まると考えている。

- リアクションペーパーをしっかり書く学生が増えたような気がする。
- 講義資料配布が楽になった。(印刷を依頼するより手間がかからなくなった)
- ZOOM で授業を行ったときなど、きちんと受講する学生にとっては、目の前で教師が話していることになるのだから、他者に邪魔されずより集中して受講できる。
- 講義中の学生の質問が非常に多くなった
- オンデマンドの場合、学生が授業動画を見直すことができる点 (聞き逃しや、理解できなかった部分を、再度聞けるという点)。
- ブレイクアウトルームによるグループでの意見交換は、対面授業よりオンラインの方が盛り上がっているように思う。
- オンラインにより、校舎間の移動等がないので、履修の自由度が高まっているように思われる。
- Google classroom を使用した結果、教材の提出・配信・リアクションペーパーの回

収がスムーズにいった。対面授業でも、こういったオンラインのツールは取り入れていきたい。

- リアクションペーパー提出がオンライン化されたことで、例年よりも長く時間をかけてたくさんコメントを書く学生が数名おり、活発な意見交換ができた。
- ZOOM での模擬授業では、教室全体の雰囲気を目を向けることが不可能であったぶん、学生の意識がより授業の中身に向けられているように感じました。
- ビデオ解説を何度も見直して復習することができ、インターネットも利用しやすい。また必要なときには ZOOM 等で対面することも可能である。
- 挙手のボタンや投票機能、チャット、Google フォーム、ブレイクアウトルームなどを積極的に利用することで、いつもよりも学生にとっては参加している感があったと思う。Blackboard のテスト機能で毎回の理解度をチェックすることをもって「出席」とカウントしていた。毎回、前回のテストの解説から始めることで、学生にとっては復習にもなっていたことは大きな利点だったのではないかと思う。
- 対面授業の際は、授業終了時にその場でリアクションペーパーを書いてもらっていたが、じっくり考える学生、考えるのに時間がかかる学生にとっては、授業終了後にある程度考えて書くことができたのは、よかったのではないかと考える。質問なども出しやすかったのではないだろうか。かつ、それを受けて次の授業で質問や意見を紹介



しながら授業を行うことができた。授業で提示するイラストや表などは、学生がそれぞれ手元の画面で、カラーで見ることができた。

- 通勤の軽減と、資料の一括提示が思った以上に負担軽減となった。他キャンパスの学生も入り、受講生が増えた。

#### 5. オンライン授業における学生の反応や意見、希望などについて（一部）

- 顔出し無しには、2名の学生ともすぐに賛成してくれた。音声だけの形式がいいという意見も言っていた。
- オンラインでできる内容であるなら、オンラインがよいということ。対面でしなければできない授業を授業者が構築する必要がある。
- 協働等での顔出しをできる限りして、対話を行ってほしいと要望したが、顔出しを選択しないグループが多数であった。また、普段から面識があるわけでもないのに、協働での作業よりも、個人での作業を好む傾向があると感じた。
- 一部に積極的に発言する学生がいて助かったが、受講者全体の様子を知ることはできないものだろうか。
- オンデマンド型の利点を述べてくれる学生が多かったと理解している。
- 学生は1年生が多く、質問がしづらいようであった。
- 基本は顔を映し出してほしいが、色々な事情があり、強制的にという訳にはいかなかった。

- 今回は模擬授業のデータを解釈することに焦点化したので、内容は把握しやすいようであった。課題の提出も良好であった。
- 授業時間外の学習が多くなっている。
- 受講生より学修時間の調整をするのが難しい、という意見があった。具体的には、授業時の課題が、ある程度時間を使ってやらなければならないので、ほぼすべての授業でそのような状況なので負担感が大きいとのことであった。
- 本来の単位制度のシステムから考えると授業時間外の学習は必須のはずだが、実際のところ、講義を聞いて最後に課題をやって、テスト前にある程度勉強をする、という授業が多い認識で履修登録がなされていたと考える。
- 毎回リアクションペーパーを書いてもらったが、特に、対面の方との違いは感じられなかった。
- 集中度や取り組む姿勢は、2020年度については、かなり高めだったと思う。
- 概ね、受講状況や反応がよく、特に問題ないと思うが、オンラインだと、やりとりが教員－学生間になり負担な場合も生じると感じた。
- いつもの学生アンケートが無かったので、春学期の最後に自分で作成したアンケートの結果（学生の意見や感想）を秋学期の授業にも反映させるようにした。また学生は100分続けて授業を行うとやや負担が大きいかと分かったので、ブレイクアウトも含めて秋学期は緩急の付け方など意識するようにした。

- 授業の前後で、学生同士でできる雑談のようなもの(教室では自然に起きる)をできる仕組みをオンラインでもつくる必要がある。
  - オンデマンド配信はいつでも見られる反面、学生の反応はいまひとつであった。ただし、掲示板利用時間を授業時間前後3時間に集中させることで、8割近い学生が同じ時間帯に講義配信を閲覧し、講師自身も3時間枠で掲示板に貼りつき、即座の反応をすることで、ただ配信をみないといけない講義というものからは抜け出せたと思われる。
  - オンライン講義だからといって、例年に比べて分かりづらいという意見は出ていなかったように感じる。
  - オンデマンドで授業をしたことが数回あるが、リアクションペーパーの提出まで求められるため、大きな宿題を出されたような感覚になり、これが重なりと辛そうであった。
  - 講義中の学生の質問が非常に多くなった。
  - 「発言をするときはカメラをオン」といったことを、学内の共通事項にすると、より授業がやりやすくなると思う。
  - ブレイクアウトルームは有効だった。受講者が4年生ということもあり、少人数での話し合いは各人意見を出してグループ内の意見を構築していた。
  - 最終回の授業でのリアクションペーパーで学生に意見を求めたところ、多くの学生はZOOMを活用したオンライン授業(リアルタイム)に好意的な意見を寄せてくれた。
- ただ、模擬授業についてはやりづらかった(教師役も生徒役も)という意見が一部みられた。
- ほとんどの学生がグループワーク室で模擬授業を行ったが、それがとても好評だった。大画面で他の学生の反応がわかりやすく、実習への不安が軽減されたとのことであった。オンラインでの模擬授業については、難しかったが良い経験になったとの肯定的な感想が多かった。
  - やはり受信状態に差が出る時があった。そして、受講生は同じ講義を聴いている学生について興味があるようであった。
  - 自由度の高いオンライン授業を学生は歓迎していた。
  - ブレイクアウトルームでのグループワークでは、カメラをオンにする、ということ徹底できると助かる。
  - 毎回、前回のリアクションペーパーの内容を紹介することで、学生からは「オンラインだけれど、他の受講生の考えがわかって、自分の考えを深められた」「課題を抱える生徒に関わる不安をもっているのは自分だけではないとわかって安心した」などの感想があった。また、講義内容に関わる新聞記事などを紹介したりすることにも、学生の反応は大きかった。
  - 直接対面で会いたかった。という答えや、学生同士も互いに交流し合いたかったというのもあったが、ブレイクアウトを使うことで少し軽減できたように思う。

6. 当該年度に担当した授業に対する意見など(一部)

- 例年、履修者数が少なく、今年複数名で非常に有り難かった。1名だけだと学生も気の毒であろうし、かといって、5名以上であれば、毎回音声のみの ZOOM 授業はきついと思う。また、今年は履修者が非常に熱心で優秀であったことも、オンライン授業がうまく機能したことと関連ある。
- 模擬授業のときだけ対面としたが、常に対面、常にオンラインではなくその時々でやることを認めてほしい。そのために来年度も ZOOM のアカウントをきちんと維持してほしい。
- 学生と対面しておらず、どのような学生かがつかめないままに授業を進めていかなくはないのが、大変であった。すでに来年度もオンラインと決定しているが、状況によっては、対面でも行えるように、ご検討いただきたい。
- オンライン授業への変更に伴い、大学内もいろいろと大変だったであろうと推察するが、兼任講師にも不安なく授業に取り組むことができた。感謝している。次年度もオンデマンド型での実施を許可いただいたことを重ねて感謝申し上げる。
- 来年度も、担当する授業はオンラインとなった。少々寂しさがあるとはいえ、学生のために、よりよい授業を実施したいと思う。
- 学生も機械の操作で分からないことやトラブルが起きた時など、早急に対応できるような体制を取れることが望ましい。また、機器の整備が必要であると感じる学生もいるので、オンライン授業を実施するのは良いが、その部分で大学側が充実した環境をそろえられることが求められると思う。
- 4月は自分がオンライン授業をすることができるかどうか不安だったが、ご支援のおかげでなんとか乗り切ることができそうである。また、オンラインにはそれなりの良さがあることにも気づくことができた。
- 今後は、オンライン授業という新しい授業方法が、大学のみならず、初等中等教育の現場でも、一般的な方法となるのではないかと考えている。そのようなことをふまえると、教職課程の授業であるからこそ、将来、自分自身が中高で授業を行うことを想定しながら、オンライン授業そのものを考えさせることができたのではないかと考えている。
- 授業に応じて、オンラインであったり、対面であったり、使い分けができると良いのではないかと考えている。しかし、コロナの感染者が増加する今、対面授業を行うことに対しては、学生だけでなく、教員自身、その日その日の授業を、本当に対面を行っても良いのかを自問自答し続けている。
- 早くから方針が決まっており、ご案内があったので、助かった。
- 環境整備や学生の窓口になってのご指導やアンケートを含む折々の情報提供など、前例の無い中状況の中で、いつも大変丁寧なご対応をして頂いた。
- 課題の量などで、初期に脱落してしまう学生をどう支えるかが、来年度の課題と考え

ている。

- オンデマンド配信は、リアルタイム配信に比べて、録画・配信事情に詳しくないとなかなか大変であった。また自宅や研究室で誰もいない環境の中、画面に迎えて100分近い講義を録画するのは苦痛であった。次年度、オンライン配信となるため、その苦痛から逃れることができるのが救いである。
- ZOOMの授業で遅刻をしてくる者は、ほぼ全員が「ネット環境が悪くてうまく接続できなかった」と説明してきた。異常事態であるから当然配慮しなければならないが、確かめようのないこの理由の繰り返しにはストレスがたまった。
- 課題はありながらも、オンラインでもそれなりの授業はできたように思っている。
- オンライン授業の可能性について実感をもたせて知ることができた。対面授業でもオンラインの良さを取り入れていきたい。一方、授業後に学生を残して話をするといった「余白」の部分が切り取られ、そこから生まれる関係性や方向性といったものが失われてしまった。その部分をオンラインのみで行うとすると、どのように補っていくか検討している。
- 様々なことに対応せざるを得ない大変な中、教職実践演習の実施にあたってご準備いただきました先生方、事務室の職員の皆様に感謝している。
- リアクションペーパーに書かれた感想から、自分の知識を再考したり、考えが新たな展開につながったりすることがあった。

学生はまじめだと感じた。教職課程では、専攻が異なる学生が集まる。この<異なる>専攻の受講生を交わせる工夫をすることが、学生にとってプラスになると感じている。

- 少人数のクラスなので、全員にきめ細かい指導ができた。
- 講義中は、学生の表情が見えないので不安感があったが、気軽に反応があり、チャットなどでの質問もあり、グループワークをのぞきにいくと楽しそうにディスカッションしていた。教員が考えているほどの心配はないように思う。
- オンライン授業だったが、学生が授業内容に興味をもって積極的に授業に取り組んでくれたという印象があり、こちらもその反応に応えようと毎回授業内容を工夫する楽しみがあった。
- 受講人数が増え、様々な学生の声が聴くことができてよかった。学生もとても真摯に授業に取り組んでくれた。ありがたかった。

#### 〔まとめ〕

厳しい環境の中でも、学生にとっての最大の教育方法を真摯にご検討くださった先生方の熱意に、心より感謝申し上げます。特に、現在何ができるか、どのような授業にすれば学生のモチベーションが高まるかなど、多くの先生方が常に試行錯誤や創意工夫を続けてくださった様子を読み取ることができました。

学生にとっても、そして教員にとっても、まだまだ先の見通しは難しくなっております。しかし、よりアイデアを出しつつ、そして教職を

志す学生たちの学びに直結する授業を、今後も提供できるよう、お力添えを頂ければと思います。

2020 年度の授業、そして本アンケートへのご協力に改めて御礼申し上げます。

文責：岩瀧 大樹